

# 一 脱サラ牛飼いの謎

実家は牧場

自称はよくても呼ばれるのはイヤ

細くしたたかに（？）営まれる家族の牧場

タバコと甘いものが好きで、趣味はカヌー作り

父から教わった、命を扱う技術

柔らかさと頑なさが同居していた

途方もない、利益もない、だが大事なこと

# 二 首級しるしをあげたと言われましても

北海道の人は自分のルーツに興味がない？

北海道育ち、家系図を遡る

『『どうする家康』だと松山ケンイチの息子に仕えてたんだ』

関ヶ原に参戦していた初代

思わぬ北海道との縁

茶志骨のおじいちゃん

### 三 それなんて朝の連続テレビ小説

暴れ牛との戦い方

薬剤師の祖父とお嬢様の祖母

朝ドラのような新婚生活

四児を抱えての引揚げ

大阪育ちの父が関西弁でない理由

家畜獣医師だった叔父

### 四 もう時効なので語れる話

猫に話しかけていた父

ヤギと鶏がいる暮らし

きわどい葡萄酒

三つ上の兄が同級生に

ガーデニング男子高校生  
インターセプトが得意？

## 五 ご先祖の足跡求め金沢へ

先祖を探しに

大森南朋さんの先祖と同僚？

ガラス、瑪瑙、石英……

父が北海道へ移住した理由

北海道の大学で覚えたもの

## 六 遅れてきた開拓者と女たち

農家を訪ね歩く公務員

モンブランの教訓

「昔はもつとひどかった」と言ってしまうたいけれども

就農と女性たちの苦勞

開拓の資金は世界銀行から

開拓の副産物「おいしいシメジ」

自然と動物とともに経営するということ

新酪農村計画と父の決断

## 七 ファミリーヒストリー 遺伝子編とユートピアの向こう側

親からの「引継ぎデータ」が気になり始めた

羊の便が入った郵便物

遺伝子を調べてみたら……

DNAタイプから人類史に思いを馳せる

夫婦二人幼子三人の牧場

釧路までの通院

一本多いサイロ

酪農家の懐事情

## 八

今も昔も牛飼いはつらいよ

---

河崎家に届いた四十センチ四方のケーキ

頷く父、全力で喜ぶ母

酪農経営には「総合雑学」が必要

酪農経営を左右する三つの要素

ピンクの牛乳

酪農家はハードモード職

## 九

ネクストジェネレーションと母の夢

---

「手伝い」で培われたもの

どれだけ気をつけていても……

幻のデビュー作

河崎牧場の代替わり

母のチーズ

牧場で牛乳が売りにくいのはなぜか

念願の工房

## 十

楽しみの見つけ方と逆境からのリベンジ

農家の日課は昼寝

ワカサギ釣りは一大レジャー

ピークは穴をあけるまで？

父は「ええかつこしい(怒)」

家族が繋いだ牧場と工房

173

## 十一

石に穴を穿つということ

ゴールデンウィークのニオイ

別海が沸いたセンバツ

移ろう世代

親戚でもないけれども

小市民の歴史

189

北海道の物語を書くということ

## 十二 家族と血族と一族と

煙は溜息の代わりに

スパルタ草刈りが繋いだ縁

「札幌の父」の思い出

家族の物語を書けた理由

先祖も家族も、結構頑張った

自分の「根」

追記 その後に判明したこと

一 脱サラ牛飼いの謎





## 実家は牧場

私の実家は北海道東部で酪農業をしている。現在の経営者は私の長兄だ。一時期羊飼いをしていた頃は私も酪農の仕事をしつつ畑の一角を使わせてもらっていたが、現在は家を出て物書きの職を得ている。

ありがたいことに、小説などを刊行すると雑誌や新聞社にインタビューをして頂く機会がある。

## 『実家が農家』

『北海道の歴史を題材に小説を書くことが多い』

以上二点が組み合わさると、インタビューアの何割かが以下の質問をする。

「じゃあ、河崎さんはご先祖の代からの開拓農家なんですね」

厳しい自然と戦った歴史。大地を切り拓いたフロンティアスピリット。そういったものを期待して、インタビューアの目がキラキラ光る。私は一瞬言葉に詰まる。若干答えづらい。だが事実を言わなければならない。

「いえあの、違います。もともとは両親ともに公務員でして。脱サラして牛飼いになりました

た」

「……そうなんですな」

答えを聞いた質問者は言葉とは裏腹に、『ガツカリ』という気持ちと表情と声音こゝろねから見え隠れする。

なんかごめん。記事的に映ばえない出自で。うん確かに開拓期の小説も書くことがあるので、『開拓者の末裔まつゝいが書きました！』という雰囲気まつゝいを押し出した方が各方面で良いのだからうけれど、嘘うそを言って盛るわけにもいくまい。だって事実なのだから。

自称はよくても呼ばれるのはイヤ

ここで一つ、些細ささいな言葉の表現について説明しておきたい。『酪農家』と『牛飼うまい』の同義性、そして使い分けについてだ。

通常、『牛を飼育して牛乳を生産する職業』は『酪農業』と表現される（テレビでは特にそう）。その職業に従事している人は『酪農家』、雇用されている人は『酪農従業員』。

そして、従事している人たちは自らの仕事を『牛飼うまい』と称することがままある。

ただ、これは自ら称する時や同業者間で使われる言葉で、他業種の人から（ましてや公的な意

味合いのある場で)『牛飼』と呼ばれるといい顔をされないことが多い。

米農家や野菜農家が自分たちを『百姓』と呼ぶのはよくても、他から『百姓』とは呼ばれたくない、ということに似ている気がする。

(なお、私が長年従事していた『羊飼』業は、人から『羊飼』と呼ばれることが普通だ。そして言われた側が嫌な気持ちになることはない。それは代替可能な名称がないうえ、国内でこの職業の歴史が浅いこと、聖書など外国の文化・文献の翻訳で『羊飼』という表現が定着していることが所以だと思われるが、正確にはよく分からない)

#### 閑話休題。

自称はよくても外部から呼ばれるのはイヤ。そんなめんどくさい『牛飼』という言葉ではあるが、私は父が生業なりわいとして選んだこの仕事を、本書では『牛飼』と題名に使用し、本文でも呼び続けていくことにする。なにしろこれは私たち自身についての話なのだ。私的極まりない主題ではあるが、お付き合い頂ければと思う。

#### 細くしたたかに(?) 営まれる家族の牧場

河崎家は、私が生まれた昭和五十四年にはすでに牛飼いをしていた。創業五十年以上。北海

道だとお店でこれぐらい経営を続けると『老舗』と呼ばれることもあるが（京都の人とかに笑われてしまいそうだけれど、歴史が浅いのでそのへん加味して下さい）、さすがに戦後入植の農家は新しい方に分類される。

場所は北海道東部、根室半島と知床半島のちょうど間ぐらいにある別海町。東は海に面し、西にやや細長く伸びる地域のほとんどが森か湿地か牧草地だ。

町の広さは広大で、東京二十三区二つ分と少し。北海道内の市町村でも大きな方だ。主な産業は酪農と漁業。大手乳業メーカー各社の大きな工場がある。あとは産業ではないがかなり大きな自衛隊の演習場もある。

夏は海霧の発生で気温三十度にならないぐらいに涼しく、冬は太平洋側らしく道内にしては雪は少なめ。そのかわり、しばしば強烈な地吹雪が起きてはせつかく除雪した道路も家の周りも横殴りの雪に覆われてしまう。

火山灰土と冷涼な気候、傾斜の少ない地形のため湿地が多い。これらの条件により、農業としては米作りはおろか畑作も難しく、牛が食べる牧草やデントコーンならなんとか作れる、ということでは日本有数の酪農地帯になった地域だ。

町内の牛の数は約十一万頭。人口約一万四千人に対してなので、一人あたり七頭以上の牛

がいることになる。「人より牛の数の方が多い町」というキャッチフレーズになるのはこの統計ゆえだ。

(もつとも、実は北海道の町村のかなり多くで「牛の数÷人口」の図式が当てはまるのだが、こと別海町に関してはこの比率が特別抜きんでている)

漁業はサケ、ホタテなど貝類に加え、野付半島のつけという砂嘴さしが作り上げた穏やかな内湾に生息するホツカイシマエビが有名だ。

町内の鉄道は約三十五年前に廃止され、最寄り駅は隣町の根室市か標茶町しべちやちよう。最寄りの空港は隣町の中標津町なかしべつちよう。最寄りのイオンは車で約一時間半離れた釧路町くしろちようにある。ちなみに最寄りの映画館もこのイオンの中だ。

農林水産業が盛んで、食べ物おいが美味しく景色がきれいで、人口が少ない。要するに田舎なのである。

田舎ゆえの悪いところもないではないが、私にとってはおおむね良いふるさと。それが脱サラした父が選んだ入植地・別海町である。

そんな父が開いた牧場は今も、細々とではあるが営農を続けている。経営規模は小さく、いわゆる家族経営だ。

牛の数は現在約百二十頭。敷地面積（酪農の場合は牧草地の広さとほぼ同義なわけだが）は約七十ヘクタール。形態は開業当時から変わらぬ放牧酪農だ。五月末から十月までは牛たちは牧草畑で昼夜のんびりと草を食<sup>は</sup>み、朝夕の搾乳<sup>さくじゆう</sup>の時だけ牛舎に戻<sup>かえ</sup>ってきて配合飼料も食<sup>く</sup>べる。放牧ができない晩秋から春先までは牛舎内で自家牧場産の乾草<sup>かんそう</sup>を食<sup>く</sup>べ、日中は運動場に出されて日向ぼっこをする。

経営は父の後を継いだ長兄夫妻が営み、首都圏からUターンした次兄も従業員として働いている。昨年、長兄の長男が農業系の大学を卒業して実家に戻<sup>かえ</sup>ってきた。今後、後継者となる予定<sup>よ</sup>定<sup>てい</sup>のよう<sup>う</sup>だ。

近年、飼育頭数千頭オーバーのメガファームが増えたことを考えれば、家族で運営しているごくごく小さな牧場なのだ。

また、基本は牛乳生産だが、小さなチーズ工房も設けて小規模ながら販売もしている。五十年程前、入植当時に建てた最初の家は幾度かの大地震でガタがきたため、新しい住宅に建て替えている。建て替<sup>か</sup>えついでに家の一角にチーズ工房を造ったのだ。こちらは母と次兄がチーズを手作りして販売している。生産量はそう多くはないが、美味しいと言<sup>い</sup>ってくれるお客さんのお陰<sup>かげ</sup>で、農作業のかたわら細く長く続けられている。

父が入植した頃から牛の数もいくらか増えたし、主に離農した農家から放牧地を購入する形で土地も少し広くなった。しかし特別人を雇うでもなく、家族みんまで毎日作業し、夏になれば自分のところの牧草を刈って冬の餌を用意しておく。農閑期はなく、忙しい毎日だ。

贅沢ぜいたくはできないが貧乏でもなく（入植当初はさすがに大きな借入金があったが、両親や兄弟婦が毎年地道に働いてくれたお陰で当時の負債は返済し終えている）、家族そろって食えることが好きなので毎日ギヤーギヤー言い合いながらテーブルを囲み、ニュースや野球中継を見つつヤイヤイ勝手なことを言ってちよつと早い時間に眠る。そして朝早く起きてまた牛の乳搾りちちしほ。そんな普通の農家の家族だ。私が生まれる前から現在に至るまで変わらないうちの牧場を形作ったのは、元気でキャラクターが濃いめの母と、そして間違いなく父なのだ。

タバコと甘いものが好きで、趣味はカヌー作り

父はあまり気の強い人ではなかった。少なくとも、子どもだった頃から私にはそう見えていた。私が悪さをすると叱るのも怒るのも母と兄で、その分、たまに父に叱られると「これは本当にいけないやつ」と反省を深くした。

酒はあまり飲まない代わりにタバコは欠かさず、たまに出かける機会があればひよいとパチ